

ジェイン・オースティン『ノーサンガー僧院』

宮 崎 孝 一

Northanger Abbey が1797-8年に『スーザン』(*Susan*) という名で二冊本として書かれてから暫く修正が加えられなかったが、1803年に最終的な推敲がなされ、ジェイン・オースティンはその原稿を兄のヘンリー(Henry) に託した。彼はそれを出版者リチャード・クロスビー(Richard Crosby) に渡し10ポンドを受け取った。クロスビーはこれの近刊予告を行なったが、それ以上は何もしなかった。

1809年までジェインはクロスビーに対して何の催促もしなかったが、この年にアシトン・デニス夫人(Mrs. Ashton Dennis) という名前を用いてきびしい詰問の手紙を書いた。そして何の応答もなければ他の出版社に依頼すると記した。クロスビーからは、自分は出版を請け合った覚えはないこと、しかし、もしよそから出版されるならば訴訟を起こすこと、なお、10ポンドを返すならば原稿は返却する旨の返事が来た。それから九年がたち、彼女はこの申し出に応じて原稿を取り返した。しかし、彼女はそれを十分に見直さなかったらしく、これが出版されたのは彼女の死後一年してからであった。ジョン・マレー(John Murray)によって『説得』(*Persuasion*) と同時に *Northanger Abbey* として上梓されたのである。

(1) キャサリンの生い立ち

この小説の書き出しは次のように始められている。

幼い頃のキャサリン・モーランド(Catherine Morland)を見た人は誰一人として、この子がヒロインとして生まれついているのだとは想像もしなかったであろう。……痩せぎすで不格好な体つきをしており、皮膚は青白く、髪は黒っぽくてウェーブがなく、目鼻立ちが

きつかった。……男の子の遊びなら何でも好きで、取り分けクリケットが大好きだった。……勉強については、教えられるまでは何事も覚えず、理解もせず、時には教えられても理解できない場合もあった。注意が散漫なことがしばしばだったし、ぼうっとしていることも時々あったからである (I, i)。

このキャサリンが15歳になると、だいぶ女の子らしくなり、親たちも彼女の容貌に満足するようになる。しかし、彼女は17歳になってもまだ男友達がいない。その理由は次のように説明されている。

これは実に不思議なことだった。しかし、不思議なことも、その原因がはっきり究明されれば納得できることが多いものである。近辺には貴族は一人もいなかったし、——准男爵さえもいなかった。知り合いのどの家にも、玄関で偶然見つけた男の子を育て上げたとか——身許の不明な若者の世話をしているとかいうのはなかった。彼女の父親には被後見人もいなかったし、教区の郷土は子供がなかった (I, i)。

幼い頃のキャサリンのトムボーイぶりや、ほんやりしていたことも、年頃になった彼女の周囲に格好な男性がいなかったことも、18世紀から19世紀初頭にかけての小説に対するアイロニーであろう。初め身許のはっきりしなかった若者が立派な恋人を得る例としては、ヘンリー・フィールディングの『トム・ジョーンズ』(Tom Jones) や『ジョウゼフ・アンドルーズ』(Joseph Andrews) の主人公などがこれに当たるであろう。

モーランド氏は牧師で、キャサリンをも含めて10人の子供がいる。

10人の子供のいる家庭は、立派な家庭と常に呼ばれるであろう、この人数に足るだけの頭と腕と脚が揃っている話であるが (I, i)。

と作者は思い切った冗談を飛ばしている。

(2) バースで

モーランド家と親しいアレン氏 (Mr. Allen) が痛風治療のために6週間滞在の予定でバースへ行くことになり、キャサリンは夫妻に同伴することを誘われる。バースに着いた当座の三人には知り合いは誰もなく、キャサリンは手持ち無沙汰で心細い思いをするが、やがてグロスターシャー出身の牧師ヘンリー・ティルニー (Henry Tilney) に紹介される。紹介者はバースの宴会場の司会者キング氏 (Mr. King) であった。ヘンリーは24~5歳でソフィステイクेशनとウィットに富んだ青年である。やがてキャサリンは、ヘンリーの妹エリナー (Eleanor) とも近づきになる。

また、アレン夫人の旧友ソーブ夫人 (Mrs. Thorpe) に会い、その息子のジョン (John) 及び娘のイザベラ (Isabella) ともつき合うようになる。そして、ジョンはキャサリンの兄ジェームズ (James) とオックスフォードで友人であったことが分かる。イザベラはキャサリンより四歳年上で、キャサリンに比べて世間知に長けており、男性の扱い方も巧い。

キャサリンはイザベラに教えられて、ラドクリフ夫人作の『ユードルフォー』(Udolpho, 1794) を耽読する。当時評判のゴシック・ロマンスの代表的作品であった。イザベラは更に12冊ほどの同種の作品をキャサリンに薦め、キャサリンは恐怖派小説の雰囲気捉えられた形となる。

バースでは毎晩ダンスが行なわれ、キャサリンはヘンリー・ティルニーと踊る機会もあり、彼の機知に富んだ会話に引きつけられる。彼はダンスと結婚とを比較して、キャサリンの思いつかなかった結論を出したりする。

ダンス以外に、昼は若者たちで散歩したり、馬車で遠出したりすることも多い。ある朝、それは、キャサリンがティルニー兄妹と一緒に散歩に出る約束の日であったが、生憎雨が降っていて、ティルニー兄妹は約束の時間に迎えに現れない。そこへソーブ兄妹が馬車で遠出に誘いに来るので、キャサリンは断り切れず仲間に加わる。馬車を走らせている途中、ティルニー兄妹が歩いているのが見えたとき、イザベラが言う。キャサリンは、直ぐに馬車から降りしてくれるようジョンに頼むが相手にされない。ジョンは意地悪な快感に浸っているのである。ドライブがすんでキャサリンが家に帰ると、ティルニー兄妹が迎えに来たことを召使に

聞かされる。キャサリンは悲しい。その夜のことを作者は次のように記している。

今、私のヒロインを眠れぬ臥所^{おしど}へ導こう、これこそ真のヒロインの赴く所なのだから。いばらがまかれ、涙に濡れた枕のある所である。これから後の三ヵ月間に、彼女が一度でも安らかな眠りを得られたら幸いと言うべきであろう (I, xi)。

このようなスタイルは、当時流行の感傷小説のパロディーであろう。これより数章前には、キャサリンが舞踏場で、目ざしていたヘンリー・ティルニーと踊れず失望したときのことが次のように記されている。

この夜の出来事によるキャサリンの不幸は次のようなものであった。まず、部屋にいる間は、まわりにいるあらゆる人々が何かにつけて癪にさわった。それが急速に疲れとなり、無性に家に帰りたくなった。家に帰りつくと、疲れは異常な空腹となり、それが満たされると、床に就きたくてたまらなくなった。これが彼女の悲嘆の究極であった。床に就くなり彼女はぐっすり眠りこみ、9時間眠り続けたのであった (I, ix)。

この辺りはバーレスクに近いものとなっている。

キャサリンがソープ兄妹に遠出に誘われるエピソードがもう一度語られる。この時、彼女はティルニー兄妹と別の約束をしたばかりなので、イザベラの泣き落とし戦術にも応じず、断固として断る。するとジョンが独断でエリナーに会いに行つて、キャサリンが自分たちのパーティーに加わることの了解を取りつけてくる。ジョンのやることは万事自己中心なのである。キャサリンは非常に不愉快で、ソープ兄妹の仲間にはついに加わらない。そして後でエリナーに会つて事の次第を話し、自分の立場を理解してもらう。評者の中には、キャサリンの生き方には発展がないと主張する者もあるが、この時のキャサリンの断固たる態度などを見ると、彼女の身の処し方は進歩してきていると感じられる。

若い男女が交際しているうち、愛情または、それらしきものが芽生え、キャサリンの兄ジェームズはイザベラと婚約する。また、ジョン・

ソープはキャサリンに気がありそうな素振りを示す。しかし、ジョンの自慢癖や厚かましさにはキャサリンは嫌気がさしているのでもっともに相手になる気はしない。

モーランド氏は息子ジェームズの結婚につき年400ポンドの聖職禄を与えようと言うが、その額の少なさにイザベラやソープ夫人は内心不満の様子である。この頃、ヘンリー・ティルニーの兄、フレデリック・ティルニー大尉もバースに現れ、イザベラと踊ったりするので、キャサリンは兄の婚約のことが心配になる。結局イザベラはジェームズとの婚約を解消するが、さればと言ってティルニー大尉と結婚するにも至らなかった。ティルニー家としては、イザベラの家財産が少ないことが気に入らなかったのである。こういう経緯を読むと、「人間万事金の世の中」の感を免れ難い。

(3) 僧院に招かれて

アレン夫妻が予定より二週間長くバースに留まることになり、キャサリンが喜んでいると、更に思いがけず、彼女はティルニー家の住居であるノーサンガー僧院に招待されることになる。キャサリンは僧院のたたずまいなどを想像し、心の躍る思いである。

ティルニー家の当主ティルニー將軍は見るからに気むずかしそうな人物で、キャサリンは近より難い感じがする。ノーサンガーへの道中、キャサリンは幸いにヘンリーと二人だけでカリクル (curricle, 二頭立て二輪ほろ馬車) で旅をすることになる。この間、ヘンリーはノーサンガーを舞台とする怪奇談を事細かにキャサリンに語り、いやが上にも彼女のゴシック趣味を駆り立てる。しかし、ノーサンガー僧院に着いてみると、一見したところ、何の変哲もない現代的な普通の建物である。

キャサリンが案内された部屋には大きな箱が置いてある。奇異の感に駆られた彼女がそれをあけてみると、中には掛けぶとんがきちんとたたまれて入っただけなので彼女は拍子抜けする。また、夜になってから、キャビネットの存在に気づき、苦心の末、その奥から、何やら曰くありそうな書類の束を取り出す。その文字を判読しようとして、ろうそくの芯をかき立てると火が消えてしまう。やむを得ず、その夜は恐怖と好奇心を抱いたまま寝るが、翌朝、明るい日光の下で見ると、重要書類と思っただけの洗濯屋の勘定書きであった。キャサリンは、馬車の中で聞

かされたヘンリーの怪奇談、更にはそれ以前に耽読したゴシック・ロマンスの雰囲気支配されて、部屋の中に神秘的な物の存在がなくては気がすまない感じだったわけである。このくだりを、作者はゴシック趣味へのパロディーとして描いたのであろうが、余りに人工的描写に走り、作者の意図が見え過ぎる嫌いがある。

朝食後、キャサリンは将軍に案内されて、庭園や各部屋を見せてもらう。歩きながらエリナーが死んだ母についての話をするが、その話から察するに将軍は夫人に苛酷だったらしい。建物の中の通路の一つをエリナーが開けようすると、将軍がそれを遮る。エリナーはキャサリンに、母の部屋を見てもらおうと思ったのだと言う。この母親は九年前に急死し、エリナーはその死に目にあえなかったのだと聞き、キャサリンの胸に疑念が湧く。将軍は表情が暗いし、一人で長い間応接間の中を歩き回る習慣があり、夜も遅くまで起きていて何か読んでいるという。この建物のどこかの部屋に将軍の妻が閉じ込められていて、深夜将軍が粗末な食事を彼女のところに運んでいるのではないかとキャサリンの想像は広がって行く。翌日は日曜で、教会で将軍が妻の碑に見入っているのを、キャサリンは不思議な気持ちで眺める。

その翌日キャサリンはエリナーの部屋でティルニー夫人の肖像を見せてもらい、更に夫人の居室だった部屋へ二人で行こうとしていると、将軍が現れ、エリナーを連れ去る。キャサリンは自分一人でも夫人の部屋を調べてみることにし、入ってみるが、何の変わったこともない普通の部屋である。そこへヘンリーが現れ、現代のイギリスに不思議なことなど起こりようはずがないことを説いて、キャサリンの、将軍に関する疑念を晴らす。

(4) ヘンリーの弁舌

このとき、ヘンリーがキャサリンに向かって述べるのは次のような言葉である。

「もし僕の理解が間違っていないなら、あなたは、口にはできないような恐ろしい想像をしていたわけだ——あなたの抱いた疑いが、どんな恐ろしいものだったか考えてみて下さい。どういう基盤に立って判断していらっしゃるのですか。我々の生きている国や

時代をどういふものだとお考えですか。我々はイギリス人で、我々はキリスト教徒なのだというのを忘れないで下さい。あなた自身の理解力、起こりそうな出来事に関するあなたの感じ、周囲に起こっていることについてのあなた自身の観察などに照らして考えてみて下さい——そんな極悪非道なことを我々の受けた教育が許すでしょうか。そんなことを我々の法律は黙認するのでしょうか。社会的な、また、文学上の交際が、この国のような基礎に立っている土地で、そんなことが世間に知られずに行なわれるものでしょうか。そこでは、すべての人が、周囲を自発的なスパイに取り囲まれ、道路や新聞が、あらゆることを明るみに出してしまうのです。モーランドさん、一体あなたはということを考えていらっしゃったのです？」(Ⅱ, ix)。

作者は上の弁舌に続けて、

二人は廊下の端まで来た。キャサリンは恥ずかしさのため涙を浮かべて自分の部屋へ戻った (Ⅱ, ix)。

と書いている。

ここまで読むと、ヘンリーは当時のイギリスの治安や個人の生活の平穩ぶりを強調しているように見える。ところがウォレン・ロバーツ (Warren Roberts) は、その警拔な著書『ジェイン・オースティンとフランス革命』 (*Jane Austen and the French Revolution*) において、この節はフランス革命時代およびそれ以後のイギリスの社会情勢が危殆に瀕している様を暗示しているのだと主張している。そして、例えば「自発的なスパイ」というものの実態を始め、当時の歴史上の事実を具体的に示している¹⁾。

トウニー・タナー (Tony Tanner) も同意見である。ヘンリーの言葉に關して彼は次のように言っている。

読者は、この弁舌が (ヘンリー・ティルニーの意図にない) アイロニーを秘めていることに気づくであろう。彼らの生きていた時代は、フランス革命と恐怖時代に続く不安に満ちており——事実、その雰圍

気は「偏執症的」と呼ばれた。外国人による陰謀が疑われ、ジャコバン同調者たちの動静がほとんどヒステリックに探索された。「周囲に起こっていることについてのあなた自身の観察」は——直接観察の及ぶ範囲の外で、あるいは水面下で起こっているかもしれないことに関する広範囲にわたるノイローゼがかった恐怖には目が届かないであろう。「教育」について言えば、それが極悪非道に対して何者をも準備させないことは、極悪非道が人を教育に対して準備しないのと同様である——「極悪非道な」(atrocious)は暗黒を意味する *ater* から来ており、教育は光を前提としている。勿論、「極悪非道」はイギリスで行なわれることができる。「暗黒」と、キリスト教の規範や法律の禁止からの残酷な逸脱や違反はどこで勃発するか分からぬからである²⁾。

さて、ヘンリーが、イギリスに起こるかも知れない物騒な情勢についての想像を抑えようとする言葉はこの節より前にも出て来る。これは、キャサリン、エリナー、ヘンリーの三人が話していたときのことである。キャサリンが、「何かすごくショッキングな出来事が間もなくロンドンで起こるって噂ね」と言ったのを、エリナーは、暴動が起こるといふ話かと思ひこんで驚愕する。実はキャサリンは新しい恐怖小説の出版される話をしようとしていたのである。そこでヘンリーが次のように説明する。

「エリナー、暴動が起こっているのは君の頭の中だけだよ。その混乱ぶりはひどいものだ。モーランドさんは近々世に出る本の話になさっただけなんだ。……モーランドさん、妹は、あなたの明瞭この上ない言葉を勘違いしたのですよ。あなたがロンドンで予想される恐怖の話をなさると——普通の人間なら誰でも気づくように、それが回読文庫のことだとすぐ考えつかずに、妹は——三千人の暴徒が聖ジョージ広場に集まり、イングランド銀行が襲撃され、ロンドン塔が脅威にさらされ、ロンドンの街路は血の河となり、第十二軽騎兵派遣隊が国家の希望をになって、反乱者を鎮圧するためにノーサンプトンから入京し、勇敢なるフレデリック・ティルニー大尉は軍の先頭に立って進撃しようとした途端、頭上の窓から投げられた

れんがによって馬からたたき落とされる——というような光景を想像するのですからね」(I, xiv)。

このヘンリーの言葉もまた、彼の意図したように、エリナーの想像の馬鹿らしさを指摘するよりも、むしろ、当時の一般のイギリス人の感じていた脅威を写し出す役を果しているように思われる。但し作者がそれを意識してこういう場面を描いたかどうかは俄に決定し難い。

(5) 将軍とマモン

ティルニー将軍が一時家を留守にすることになり、平素彼の压制ぶりに虐げられている感じの子供たちはほっとする。キャサリンも例外ではない。ところが、やがてロンドンから帰宅した彼は、エリナーに命じて、キャサリンに明朝7時にノーサンガーを離れるようにと伝えさせる。彼女は何のことやら分からぬまま、お供の召使もなく、たった一人で、馬車で十一時間もかかる故郷ウィルトシャーのフラートン(Fullerton)に向かうことになる。エリナーが気を利かせて小遣を貸してくれる。

家に帰りついたキャサリンは何事も手につかず、何日かを過ごす。そこへヘンリーが訪ねて来て事情を説明してくれる。将軍はバースでジョン・ソーブの話から、キャサリンを莫大な財産の相続人であると思い込み、彼女を息子の嫁に迎えることによって家の富をふやそうと計画したのであった。ところが、ロンドンで再びソーブに会ってみると、キャサリンの家には財産など全くないという話なので、将軍はキャサリンと自分とに無性に腹が立ち、あの暴挙に出たのであった。ソーブが将軍に対して前言を翻したのには、彼なりの理由があったので、妹のイザベラとキャサリンの兄ジェイムズとの婚約が破れ、彼自身はキャサリンに気があったのだが相手にしてもらえないという不満が重なって、こういう態度に出たのであった。それにしても、ソーブの言葉だけに躍らされて軽挙妄動した将軍は、ゴシック小説の怪物たちよりもなお狂暴なマモンの配下に入ったのだと言えよう。

前に見たヘンリー・ティルニーの言葉の解釈にも関連することであるが、ライオネル・トリリング(Lionel Trilling)の評言を見てみよう。

『ノーサンガー僧院』は、小さなヒロインにその腐敗した空想の誤りを悟らせるための気楽な陰謀に我々を誘いこむものだと、我々は簡単に、余りに簡単に思い込む——キャサリン・モーランドは、恐怖小説を耽読した結果、その認容し難い前提を受け入れ、人生とは過激で予断し難いものだと思えるようになる。そして、これこそ、この物語の事件によって、人生とはこういうものだと思われているものである。人生とは正常で秩序立ったものだという信念の誤りを悟らなければならないのは我々の方である。我々は作者自身の意見に従って我々の意見を定めたのだと思っているが故に、我々の意見が覆されるのを知る失望のショックは勿論一層驚くべきものとなる³⁾。

上で述べられている説に対して、ダグラス・ブッシュ (Douglas Bush) は批判的である。

一つの全く信じ難い出来事から、大きな基本的な哲学的信条を引き出すことは、ジェイン・オースティンを彼女の時代、当時一般に認められた主義、また彼女の人生観から引き離し、20世紀の狂暴と「不条理」の唱道者の間に据えることである⁴⁾。

ここでブッシュが指摘しているように、作者は一応表面上は平穏なイギリスを描いているということは言えよう。キャサリンが、一旦は將軍の怒りに触れたものの、巻末ではヘンリーと互いの愛を確かめ合い、將軍の許しも得て、平和な牧師館生活に入っていくことからそれは知られよう。ただ、兄弟二人は海軍士官であり、身内にはフランス革命でギロチンにかけられた貴族の妻だった女性エライザ (Eliza de la Feuillide) もいたジェイン・オースティンが、時代の激しい動きに関心だったとは到底考えられない。その彼女の心の中の意識が時に作中に表れることがあっても不思議ではないであろう。

最後に、この小説において特徴的と感じられたことを何項目か挙げて置きたいと思う。

その一は、この小説は、殊に最後の20ページほどになると、作者が一

人称で顔を出す回数が非常に多くなることである。例を挙げれば, I, my, me, mine, us, let us, her biographer etc. の多用である。これは、あるいは習作時代に書簡体で書くことに慣れていた作者の筆法の残滓かも知れないと思う。別の言い方をすれば、作者が omniscient の立場からの語り方に十分習熟していないことの表れとも見られよう。この傾向が作品の終りに来て急に顕著になるのは、作者の推敲のペンが疲れてきた結果だと言えるであろうか。

第二に気づくのはこの小説は登場人物の数が後の彼女の作品に比べて非常に少なく、登場する人物たちも大部分が、思考の密度や会話の交換の入り組み方が希薄であることである。モーランド夫妻、アレン夫妻、ジェームズ・モーランド、ソープ夫人、フレデリック・ティルニーその他、何れも然りである。言い換えれば役割に奉仕するだけの扁平な人物 (flat characters) だということになろう。

第三に、この小説の第一部のバースを舞台とする部分と、第二部のノーサンガー僧院あるいはゴシック趣味を中心とする部分とでは、有機的なつながりに乏しく、読者にまとまった印象を与えないということが言えよう。以上要するに作者の才能は認められるものの、習作の域を完全には脱していない作ということになろう。

〔注〕

- 1) Warren Roberts: *Jane Austen and the French Revolution*, pp. 22-31.
- 2) Tony Tanner: *Jane Austen*, p. 69.
- 3) Lionel Trilling: *The Opposing Self*, p. 207.
- 4) Douglas Bush: *Jane Austen*, p. 69.

その他

I 『スーザン令夫人』

Lady Susan は、ジェイン・オースティンの甥に当たるジェームズ・エドワード・オースティン＝リー (James Edward Austen-Leigh) が1871年に出版した『ジェイン・オースティンの回想 (*A Memoir of Jane Austen*)』の第二版に他の小編と共に初めて発表された。原稿には標題はついていなかったのだが、オースティン＝リーが発表に当ってこの名前をつけたのである。

オースティンがこれをいつ執筆したかは明らかでない。推定の唯一の根拠は、現在残っている清書に用いられた紙のうちの二枚に 1805 という透かしが見られることだけだからである。最初の執筆は、彼女がステイーヴントン (Steventon) を離れる1801年より前のことだったかも知れないし、あるいはバースに住んでいた落ち着いたのない時代 (1801-1806) のことだったかも知れない。これについてメアリー・ラセルズ (Mary Lascelles) は次のような憶測を述べている。すなわち、清書の元となった作は、『エリナーとメアリアン』(*Elinor and Marianne*, 後に『分別と多感』となったもの)と同様、ステイーヴントン時代に書簡体で書かれたのだが、オースティンが後になってバースにおいて再びこれを取り上げて完結させようとしたとき、書簡体で書き続けることに嫌気がさして、三人称の短い結末 (Conclusion) を加えるだけで終らせたのかも知れないというのである¹⁾。

なお、*The Oxford Illustrated Jane Austen* の *Minor Works* の解説でサザム (B. C. Southam) は、他の関連のある原稿との比較から、この作は1793-4年頃に書かれたものであろうと推測している。

〔注〕

- 1) Mary Lascelles: *Jane Austen and Her Art*, pp. 13-14.

この小説は末尾の「結び」(Conclusion)を除くと、41通の手紙から成っている。その中で一番多いのは当然のことながらスーザン令夫人のもので16通、次に多いのがヴァーノン夫人 (Mrs. Vernon) の12通、それからジョンソン夫人 (Mrs. Johnson) の5通となっている。

スーザン令夫人は四ヵ月ほど前に夫に死別した三十五歳くらいの未亡人である。この小説の第一信は、彼女から亡夫の弟ヴァーノン氏に宛てたもので、ラングフォード (Langford) 発となっている。ラングフォードは彼女の親しいマナリング夫妻 (the Manwarings) の邸のあるところである。彼女は夫の死後ここに身を寄せていたのである。しかし、ここは彼女にとって住みよい所でなくなっていた。文面によれば、この家の人たちは社交好きなので、現在の自分の気持ちにそぐわないということになっているが、これは表面の理由であって、実は、マナリング夫人が夫と令夫人との間を疑い、嫉妬し始めたことによるのである。そこで彼女はヴァーノン氏への手紙で、ヴァーノン夫妻の住むチャーチル (Churchill) に移り住むことを認めてもらうよう依頼したのである。

令夫人の第二信は、ロンドンに住む友人ジョンソン夫人宛てのもので、同じマナリング邸に滞在しているサー・ジェームズ・マーティン (Sir James Martin) のことを報じている。彼がマナリング氏の妹マライア (Maria) に近づこうとしているのが怪しからんというのである。彼是一方、令夫人の十六歳の娘フレデリカ (Frederica) に令夫人を通じて求婚したがフレデリカが断ったという経緯^{いきさつ}もあり、また、令夫人自身が次第によっては自分が結婚してもよいと思っていた相手でもあるという複雑な関係なのである。

令夫人がチャーチルに住むことになったという報らせを受けたレジナルド・ド・カーシー (Reginald de Courcy, ヴァーノン夫人の弟) は姉に手紙を書き、その中で次のようなことを言っている。

……同じ家の中で、同時に二人の男性——どちらも他の女性に愛を捧げる自由など全然ない——から愛の約束を取りつける、しかも若さの魅力なしでそれをやってのける魔力とは一体どんなもののなの

か、彼女に拝顔の上、納得したいものです（第4信）。

レジナルドは、令夫人のラングフォードにおける行状についての噂を友人から聞いていたのである。大変な意気込みでチャーチルに乗り込んだレジナルドであったが、令夫人に会見した彼は相手のつつましく優雅な応待に接して、忽ちに彼女に好意を抱くようになる。

ヴァーノン夫人は、実家の母親への手紙でレジナルドは前には令夫人のことをひどく悪口を言っていたのに、この頃ではすっかり彼女に参ってしまっていると報告する（第8信）。

令夫人もジョンソン夫人への手紙で、レジナルドを^{とりこ}虜にしたと誇らしげに知らせている（第10信）。

ヴァーノン夫人の母親宛ての手紙を父親も読んで大変心配し、息子レジナルドに令夫人をくれぐれも警戒するよう忠告の手紙を送ってくる（第12信）。

そうこうするうち、ロンドンの私塾にあずけてあった娘フレデリカが脱走し、すぐにつかまるのだが、もはや塾には置いてもらえず、ヴァーノン氏が迎えに行つてチャーチルへ連れ帰るという事件が起こる。これを迎えた令夫人の態度が、いかにも白々しく気障だったとヴァーノン夫人は実家の母親に報告する（第17信）。

チャーチルに住むようになったフレデリカがレジナルドに思いをよせるようになったと、ヴァーノン夫人から母親への手紙（第18信）にも、令夫人からジョンソン夫人への手紙（第19信）にも記される。

こういう最中^{さなか}にサー・ジェームズがチャーチルを来訪する。フレデリカがおびえている様子、しかし令夫人は彼女とサー・ジェームズを結婚させたいとヴァーノン夫人に内緒で告げたこと、レジナルドが戸惑い、令夫人に対して気を悪くしていることなどをヴァーノン夫人は実家の母親に告げる（第20信）。

フレデリカは思い余つて、サー・ジェームズを立ち去らせるよう令夫人に説得してほしいと、レジナルドに手紙を書いて渡す（第21信）。

レジナルドがフレデリカに頼まれた要件で令夫人のところへ来て、本人の嫌っている結婚相手を娘に押しつけるとは親としてあるまじきことだと激しく非難する。令夫人は冷静だが、レジナルドは言葉の勢いで、チャーチルを去ると言明する。これは令夫人からジョンソン夫人への手

紙の内容である（第22信）。

ところが、二人は間もなく仲直りし、レジナルドはチャーチルに留まり、サー・ジェームズがチャーチルを立ち去ることになる。

また、レジナルドと令夫人が結婚することになるかも知れないと、ヴァーノン夫人は母親に手紙を書く（第24信）。

ジョンソン夫人は令夫人からの手紙で事情を知り、ロンドンへ来てレジナルドと結婚するようにと勧めてくる（第26信）。

これには様々な理由があり、その一つはマナリングが令夫人のことをひどく思いつめているので、面倒なことにならないうちに彼女が早く身を固めた方がよからうという考えも入っていた。

令夫人がジョンソン夫人に見つけてもらったロンドンのアパー・シーモア通り（Upper Seymour St.）の宿舎に落ち着くと、マナリングが訪ねてくる。マナリングの方がレジナルドよりも見栄えがすると令夫人はジョンソン夫人に手紙で告げる（第29信）。

令夫人はレジナルドに宛てて、二人の結婚のことは性急に決めない方がよい、暫く離れていることが必要だと思うと手紙を書く（第30信）。

この手紙が逆効果となり、レジナルドがロンドンに来てしまいましたと、令夫人はジョンソン夫人に手紙を書く（第31信）。

ジョンソン夫人の外出中に、マナリング夫人がジョンソン家に来て、暫くたってからレジナルドも来る。マナリング夫人は、夫が令夫人のところへ通いつめていることをマナリングの召使から聞き出してしまっていた。レジナルドもジョンソン氏からこのことを知らされる。以上はジョンソン夫人から令夫人への手紙の内容である（第32信）。

レジナルドから令夫人宛てに、彼女の今までの欺瞞を知ったこと、この上は彼女と永久に別れるよりほかない旨の手紙が来る（第34信）。

令夫人はレジナルドに宛てて、自分を弁護する手紙を書く（第35信）が、レジナルドからは重ねて絶交の手紙が来る（第36信）。

マナリング夫妻が別れることになったことをジョンソン夫人が令夫人に知らせてくる（第38信）。

令夫人はジョンソン夫人に、レジナルドは結婚する気にはなれない人物だったと書いてくる（第39信）。

「結び」の部分では、令夫人がサー・ジェームズ・マーティンと結婚したこと、レジナルドがフレデリカを愛するようになりそうなことなど

が簡単に語られている。

*

*

*

この作品の題材が、ジェイン・オースティンのものとしては異例のものであることは言うまでもなからう。

さて、スーザン令夫人を悪女とか妖婦とか呼んでいる評家が多いが、これは彼女の全貌を示す言葉ではないと私には思われる。

彼女は夫の死後、マナリング、サー・ジェームズ、レジナルド等と交渉を持つが、彼女の方から積極的に働きかけている形跡は乏しい。むしろ彼女は男性たちからの働きかけをおとなしく受け入れるという態度である。ではなぜ彼女はその働きかけをはっきり拒否しないのかと言うと、実は彼女はこの男性たちに関係のある女性たちを苦しめたいのだと思う。マナリング夫人はほとんど錯乱状態になるまで、夫の行動に悩み、ロンドンまで夫の後を追って来て、自分の後見人であるジョンソン氏に夫との間を取りなしてくれるよう頼む始末である。またサー・ジェームズは、マナリング氏の妹マライアが恋している相手なので、彼の心が令夫人に向くことはマライアが苦しむことになるのである。レジナルドはヴァーノン夫人の大事な弟であり、ヴァーノン夫人はヴァーノン氏と結婚するときに令夫人が邪魔をしたということで彼女に恨みを持って以来、ずっと令夫人には悪感情を抱いている。そんなわけで、三人の男性が令夫人に心を奪われることは、三人の女性が苦しむことになるのである。簡単に言えば、令夫人の「男好き」というより「女嫌い」の性向が、このような行動を取らせているのだと私は思う。

なお、フレデリカがサー・ジェームズのことでレジナルドに訴えたとき、令夫人は非常に憤慨してジョンソン夫人に手紙（第22信）を書いているが、これも彼女が娘の行動に女性を見て、女嫌いの情が刺激されたのではなかったであろうか。

また、末尾で令夫人がサー・ジェームズと結婚するのに、多くの読者は驚くであろう。彼は三人の男性の中で最も軽く扱われている人物だからである。これは恐らく、作者が結末を急いだため、読者が納得するような自然の経緯を説明することを省いたためであろうと思われる。

この小説を、未熟の筆になる愚作だと見る評家もあれば、マドリック

(Marvin Mudrick) のように高く評価する学者もある¹⁾。私自身は、この作をオースティンの作中で特に傑出したものとは思わないが、スーザン令夫人の何事にも動じない決断力や、自分の心の中を人に見すかされない演技力には快哉を叫ばざるを得ない。

〔注〕

- 1) Marvin Mudrick: *Jane Austen, Irony as Defense and Discovery*. pp. 127-140.

Ⅱ 『ウォトソン家の人々』

The Watsons という標題は、J. E. オースティン＝リーが1871年出版の回想記で、題名のない未完の原稿に言及したときにつけた名前である。

原稿の用紙には1803という透かしがあるので、R. W. チャップマン (R. W. Chapman) は、この作品の執筆を1803年またはその直後と推定した。実はもう少し詳細な材料もあるのであって、ファニー・レフロイ (Fanny Lefroy, ジェインの兄ジェームズの孫) は次のように記している。「1804年のいつかに彼女は *The Watsons* を書き始めたが、1805年1月27日に父親が死去したため完成に至らなかった」。ファニー・レフロイはこれらのことを家族から聞いたのであろう。

(以上は *The Oxford Illustrated Jane Austen* 版の *Minor Works*, p. 314からの引用である。)

チャップマンの *Jane Austen, Facts and Problems* には次のように記されている。

作者に、作品を未完のままに放置させる動機について推測することは無益なのが通例である。オースティン＝リーの *Memoir* では、ジェイン・オースティンが「ヒロインを余り下層の貧困と微賤の身分に属させたことの弊害」に気づいたためだとしている。しかし、これは納得が行かない。彼女が、どういう結果になるかを考えずに物語を書き始めたとは考えられないからである。彼女は下層中流階

級の生活に無知ではなかったし、野卑を恐れもしなかった。ブラウン夫人は、動機はデリカシーにあったとしている。すなわち¹⁾、エマ・ウォトソンが、兄とその妻と一緒に生活しているという境遇は、サウサンプトンにおけるジェインの生活に余りにも似ていたというのである。しかし、実際には対比関係はない。エマ・ウォトソンは兄の扶養家族になるのであるが、フランク・オースティンは彼の母や妹と協力関係にあっただけで、どちらの側も独立を失いはしなかったのであるから。(pp. 50-51)

〔注〕

- 1) Edith Brown: *The Watsons Completed*, p. 7.

サリー (Surry) 州のD町で、この冬の最初の舞踏会が行なわれることになった。オズボーン城 (Osborne Castle) のオズボーン家の人々を始め、付近の名だたる家々から大勢の男女が集まるはずである。その中でウォトソン家 (the Watsons) は遥か下層の方に位置する家族である。当主のウォトソン氏は退職した牧師で、妻に先だたれ病身なので、長女のエリザベス (Elizabeth) が看病している。彼女は二十八歳で独身であるが、かつてパーヴィス氏 (Purvis) と結婚しそうになったとき、妹のピネロピ (Penelope) が嫉妬して間を割いたという経緯があった。しかも、ピネロピもパーヴィスと結婚するには至らなかった。

今度の舞踏会にウォトソン家から出席できるのはエマ (Emma) しかない。エリザベスは父の看病、他の二人の姉は他所に行っているからである。エマは現在十九歳で、幼いときから叔母の家で育てられたのであるが、この叔母の主人が亡くなった後、叔母がオーブライアン大尉 (Captain O'Brien) と再婚し、アイルランドに住むことになったため、彼女は、十四年ぶりに生家に戻って来ているのである。

ウォトソン家はD町から三マイルほど離れたスタントン村 (Stanton) にあるので、D町に住むエドワーズ (Edwards) 家の好意で、ウォトソン家の者たちは町で集まりのあるときは、このエドワーズ家で着替えをし、食事をし、その夜は泊めてもらう習慣になっている。

エマにとってこの舞踏会は、久しぶりに町の人々に会い、受け入れてもらう機会である。エリザベスは会には出られないが、エマをD町まで送ることになり、道中、エマがこれから会いそうな人々についての予備知識を与える。その中心をなすのは、どの女性がどの男性と結婚しそうだという噂話であるが、エマは、そういう話題に興味を示さない。そして、彼女は金のために嫌な男性と結婚するくらいなら、自分は学校の教師になるという。それに対してエリザベスは、自分は教師をしたことがあるからその実情を知っている、あれほどひどいものはない。それよりも、まずまずの生活のできる明るい気質の男性を探すことだと答える。

エリザベスはまた、町で名うての色事師トム・マスグレーヴ (Tom Musgrave) が、エマに対してどういう態度を取るかにも興味がある。彼はかつてエリザベスに近づこうとしたことがあったのである。

エリザベスの弟サム・ウォトソン (Sam) は外科医で、エドワーズ家の一人娘メアリー (Mary) に恋しているのであるが、仕事のため会には出られない。このメアリーが誰と踊ったかについてエマから聞いて、サムに知らせることもエリザベスの任務である。

エドワーズ家に着いたエマは、この家の女性たちが自分に対して多少の違和感を持っているのを感じる。しかし、女性たちは着つけに忙殺されつつも、次第に打ち解けていく。食事のとき、エドワーズ氏は、エマから彼女の叔母の再婚についての情報を聞き出そうとする。

食事がすむと、八時前ごろに近所を馬車の通る音が聞こえ始め、この家の一行も会場であるインに向かう。

舞踏会場は初め寒かったが、人々が集まるにつれて温く、陽気になってくる。エマは、大勢の中で新顔なので皆の注視を浴び、賛嘆的にもなる。彼女はある士官と踊るが、この士官を彼女に紹介したのはハンター大尉 (Captain Hunter) といって、メアリー・エドワーズと二度も踊った将校であった。

オズボーン家の人々が到着する。オズボーン卿、その母、オズボーン夫人、卿の未婚の妹、卿の以前の家庭教師で現牧師のハウアド氏 (Howard)、ハウアド氏の妹で未亡人のブレイク夫人 (Blake)、彼女の十歳の息子チャールズ (Charles) ——それとトム・マスグレーヴである。

チャールズ・ブレイク坊やはオズボーン嬢と初めの二回のダンスを踊る約束がしてあったのに、彼女がベリズフォード大佐 (Beresford) と踊

ることになったので憤懣やるかたなく涙を流しそうなので、それを見かねたエマが坊やと踊ってやる。十九歳の娘と十歳の坊やの組み合わせは、衆目を集めることになり、謹厳なおズボーン卿さえ、しげしげとエマを見つめる。チャールズ坊やの母ブレイク夫人はエマに感謝し、彼女を兄のハウアドに紹介する。エマは彼とその後のダンスを踊り、知的な親しみのある人だと思う。また、エマは彼のお蔭でトム・マスグレーヴと踊るのを断ることができた。やがてハウアドはおズボーンの一行と共に帰って行く。おズボーン嬢も、おズボーン卿も彼女からよい印象を得たようであった。

翌日は、エドワーズ家に多くの訪問者がある。前夜、おズボーン卿を惹きつけた娘をもう一度見ようがために集まったのである。自分の目で彼女の美しさを確かめたいという人も、また、何かあらを探してやろうという人もいたことであろう。

訪問者の一人にトム・マスグレーヴがいた。彼はエリザベスからの手紙をあらかじめ来ており、この日エマの父親が宗教の会合に出るために「いすかご」を使うので、彼女は使えないからもう一晚エドワーズ家に泊めてもらうようにとの内容である。マスグレーヴがそれを受けて、自分のカリクルがあいているから、それに乗って帰るようにと勧める。種々押し問答をするが、エマはどうしてもマスグレーヴの厄介にはなりたくない。結局彼女はエドワーズ家の四輪馬車を借りてメアリーと一緒に帰ることになる。

エマは無事に帰宅し、エリザベスに会の模様の一部始終を語る。父親のウォトソン氏が帰って来て、会合で説教したのはハウアド氏で実に立派なものだったと話す。「その後、ハウアド氏は痛風の私を助けて食堂まで案内してくれた。また、氏は私の娘の一人について質問されたが、どの娘のことか私には分からなかった」と言う。

舞踏会の三日後、ウォトソン氏が気分が勝れず、エリザベスとエマとが二人だけで午後の食事をしようとしているところへ、訪問者がある。おズボーン卿とトム・マスグレーヴである。自分たちの質素な暮らしをエマは恥ずかしく思うが、エリザベスは何とも感じないらしい。おズボーン卿は何とか話題を見つけようとして、いろいろ試みた末、エマに乗馬を勧める。エマは、「どの女性も乗馬の趣味と、そのための費用があるとは限りませんわ……女性のやりくりでもある程度のことはできま

すが、ささやかな収入を大きなものにすることは無理でございます」と答える。このような落ち着いた率直さに打たれて、オズボーン卿は生まれて初めて、エマのような境遇の女性に対して払うべき心遣いに気づき、その後は考え深い話し方をするようになる。辞去するとき、オズボーン卿は次週の自分たちの狩猟を見に来るようにエマを誘う。エリザベスはこの訪問に驚いたが、エマはなぜハウアドも一緒に来なかったのかしらと思う。

その後、二週間ほどの間、エマとエリザベスとは互いの会話を楽しみ、愛情も増す。ところが、その静かな生活が兄のロバート (Robert) とその妻ジェイン (Jane) がクロイドン (Croydon) から来訪することによって破られる。ロバートは事務弁護士であるが、ジェインは彼がかつて仕えていた弁護士の娘で6,000ポンドの持参金つきである。彼女は、ずうずうしく生意気な女性で、エマは彼女を好きになれない。この夫婦のところに、エマの姉マーガレット (Margaret) が滞在していたのをスタンTONの生家に送り届けることと、エマに会うことが、この夫婦が来訪した目的である。マーガレットは、うわべだけの感受性と陰気さを兼ね備えており、エマは彼女に対してジェインに対するより更に強い嫌悪感を抱く。ロバートとその妻とは、エマの叔母と叔父だが、エマが当然譲り受けるべき財産を奪ったといって非難するが、エマは二人を弁護する。茶の時間に、またもやトム・マスグレーヴが現れ、皆でカード遊びをする。マーガレットはエリザベスに提案して、翌日マスグレーヴを食事に招くことにする。彼は確実な返事はせず、都合がつけば参りますと言って帰る。招待の準備のためまる一日が費やされるが、予定の時刻を数時間過ぎては彼は現れず、一同は不機嫌になる。エマは父の部屋へ行って静かに時をすごす。

ロバートとジェインとは、エマにクロイドンと一緒に帰るように勧め、エリザベスも、その誘いを受け入れるようにエマを説得する。エマよりも自分の方が、マーガレットの不愉快な態度に慣れており、我慢できるからという理由である。しかし、エマは断り、夫妻は二人だけで出発する。

作者の姉カサンドラ (Cassandra) が、この未完の作品の原稿を姪たちに見せたとき、この物語の今後の成り行きについてもある程度語った。ジェインはこの姉に対してだけは、——他の誰にも話さないことでも——そのとき手がけている作品について何でも自由に話したらしい。それによれば、ウォトソン氏は間もなく死亡し、エマは、狭量な義姉と兄の家に寄寓することになる。彼女はオズボーン卿からの求婚を拒否し、オズボーン夫人がハウアド氏を愛するようになることから物語の興味が増大することになる。そして、ハウアド氏がエマを愛するに至り、二人は結局、結婚する。

(Memoir の第二版 (1871) p. 364 より)

* * *

この小説が、オースティンの他の大部分の小説と違った感じを与える点の一つは、ウォトソン家の姉妹の間が冷たいものであることの指摘が二、三見られることである。この断片を書き進めるとすれば、姉妹の間のこの問題を冷徹に掘り下げるか、それとも何らかの調整、解決を計るかが、作品の方向を決める一つの鍵となることであろう。作者はここで迷い、ついに断片のままで放置したのではないか。これはチャップマンのいわゆる「無益な推測」の一つに過ぎまいが、私の感想である。

Ⅲ 『サンディトン』

原稿に記してある日付によって、作者がこの小説を1817年1月27日に書き始めたことが知られる。既に病勢が進んでいて、二ヵ月かかって約24,000語を書き推敲した時点で、3月18日に筆を止めたのであった。死のちょうど四ヵ月前であった。

Sanditon という標題は、未完の原稿にオースティン家の人々がつけたものである。しかし、ジェイン・オースティン自身はこの作品を *The Brothers* と呼ぶつもりであったという説もオースティン家に伝わっている。

物語が始まって、登場人物の名前がなかなか分からない。オックスフォード絵入り版 (The Oxford Illustrated Jane Austen) の4頁余り進んだところで初めて、“My name is Parker.—Mr Parker of Sanditon; this lady, my wife Mrs Parker.”と、これまで“a gentleman”と記されていた人物が自己紹介をする。この点から見ても、この作品は、今までのオースティンの小説とは変った書き方がしてある。

パーカー氏は妻のメアリー (Mary) と一緒に馬車でウィリングデン (Willingden) に来たはずだったのである。ところが、サセックス州に同名の土地が二つあるのを知らなかったため、農耕用の車しか通れない農村であるウィリングデンの小路に四輪馬車で乗り込み、馬車が転覆し、彼は足を捻挫^{ねんそ}して歩行困難に陥ったのであった。事の起りは、彼が新聞広告でウィリングデンの医師が就職先を求めていることを知って、自分が開発中の保養地にこの医師を招こうと考えて、この土地へ来たのであったが、それがウィリングデン違いで、この農村に医師などいようはずもなく、従って、差し当たり、捻挫を治療してもらう術もないのであった。たまたま農場で働いていたヘイウッド (Heywood) 氏が彼に同情して自宅へ連れ帰り、食事を与え、奥さんが素人療法ながら足の手当をしてくれる。

パーカー氏は五十三歳で、サンディトンに小規模ながらしゃれた海水浴場を作る計画を進めている。彼の医師探しにからむ失敗は、彼の事業全般の進め方の前触れになっているのであろう。足の治療のため二週間ヘイウッド家に厄介になっている間、彼は自分の計画の将来性について大変な情熱をもって一家の者たちに吹きまくる (ちなみにヘイウッド家には十四人の子供たちがいる)。

パーカー夫妻はヘイウッド家を辞するに当たり、一家の長女シャーロット (Charlotte) に同行を誘う。ヘイウッド夫妻自身は昔気質で遠出は好まないが、子供には広い世界を見せたいという気持から、二十二歳の彼女の旅行を許すことになる。(この後、彼女は事件に巻き込まれぬ傍観者として、作者に代って物語の進展をつかさどることになる。)

旅行中、パーカーは今後の参考にと、彼の事業の協力者デナム夫人 (Lady Denham) についてシャーロットに語る。彼女はベレトン (Bereton)

家を出で、現在七十歳だが、非常に元気である。今までに二度結婚した。最初の夫はホルリス (Hollis) 氏と言い、大変な金持だったが死別した。次の夫はサー・ハリー・デナム (Sir Harry) という准男爵であったが、この人も他界した。彼女は第一の夫から財産を、第二の夫から爵位を受け継いだことになる。夫人の甥のサー・エドワード・デナムとその妹のエスター (Esther) は最近、あまり夫人の覚えがめでたくない。これに比し、他の系統の親戚から夫人が呼びよせたクレアラ・ベレトン (Clara Bereton) が美人でもあり気立てもよいので気に入られている。

馬車がサンディトンに近づき、パーカー夫妻が以前住んでいた家の側を通ると、メアリー夫人は昔の生活や知人をしきりに懐かしがる。夫はそれにはお構いなしに、これから発展しようとしている海岸の様に満悦の体で、自分の家を「トラファルガー・ハウス」と名づけないで、今と違っては「ウォータールー・ハウス」とすればよかったと言う。

パーカーの弟で二十七、八歳のシドニー (Sidney) の噂も出る。快活な青年だが兄の事業には批判的であるという。更に、他の三人のきょうだいについての情報も伝えられる。妹はダイアナ (Diana) 及びスーザン (Susan) の二人で、末弟はアーサー (Arthur) と言う。この三人が揃って極度の心気症にかかっている。例えば、スーザンは頭痛のために蛭を常用し、あるときは精神安定のために歯を一度に三本も抜いたという。アーサーは何の職業にも就けないほど気が弱い。ダイアナは病気にめげず、慈善活動に熱心である。彼女には、パーカーの持っている活動性の一面が表われているのかも知れない。ダイアナは、サンディトンでこの夏を過ごすために、ある一族と、女子寄宿学校の生徒たちとを勧誘することに成功したと兄に手紙をよこしている。

サンディトンに落ち着いたパーカーとシャーロットの一行は図書館を訪れる。借り出し希望者の名簿を見ると、筆頭にデナム夫人の名前が見えるが、希望者の数は意外に少ない。パーカーはまだ七月だから、これからどんどん増えるだろうと楽観的である。

一行は図書館でデナム夫人とクレアラ・ベレトンとに会い、二人をパーカー家のお茶に招く。シャーロットはクレアラの美しさに魅せられ、いかなる文学作品のヒロインにも勝る美人だと思う。デナム夫人は非常に経済観念が発達していて、開発に伴って物価が上がり、一般人の日常生活が苦しくなるのではないかという危惧を漏らす。また、この土地に

医者を招くと、召使たちが何でもないことでも医者に診てもらい、病気だと言って仕事を怠けるようになるから、医者は連れて来ない方がよいと主張する。そして、自分の夫たちも医者に診てもらったために死んだのだと、一流の意見を述べる。

別の日に、サー・エドワードと妹エスターがパーカー家を表敬訪問する。皆でテラスに出ると、サー・エドワードとベレトン嬢とはベンチの片端に並んで坐る。シャーロットは一目見て、サー・エドワードのベレトン嬢に対する態度は恋人に対するそれであると思う。クレアラの方でそれをどう感じているかは、シャーロットには明瞭でない。

皆で一緒に歩こうということになると、サー・エドワードは突然ベレトン嬢の傍を離れて、完全にシャーロットにばかり注意を向けるようになる。彼は海や海岸について大変な情感を以て語り、更にスコット、バイロン、ワーズワース、モンガメリー、キャンベル等の浪漫派詩人に自分が如何に傾倒しているかを引用を交えつつ述べる。殊にバーンズの詩の情熱を彼が絶讃すると、シャーロットは次のような返事をする、「バーンズの詩は何篇か読みましたけれど、私は詩を完全に作者の人柄と切り離して考えられるほど詩的にできていないのかしら。……ああいう種類の人の愛情の真実さを信頼する気にはなれません。感じて、書いて、忘れてしまうという型なのじゃないかしら」

サー・エドワードはこれに対して、女性には天才の無限の情熱が分からぬとか、見当違いの弁明を行ない、結局シャーロットの軽蔑を買うことになる。シャーロットはまた、彼がクレアラを離れて自分の傍に来たのは、クレアラを刺激するためだったのだと気づいている。

皆が部屋に入ることになったとき、シャーロットは、サー・エドワードにはうんざりしていたので、デナム夫人に誘われるままに彼女と一緒にテラスに残る。デナム夫人は自分のことばかり語り、シャーロットは専ら聞き役である。夫人はエドワードとエスターが彼女に取り入ろうとして躍起になっているが自分には相手の腹のうかが分かっているから、その手には乗らないこと、兄妹とも金持の結婚相手を見つけるべきだなどと話す。そして、今の自分にはクレアラがいるので、事態は変わってきたのだと言う。

サー・エドワードは次の機会にシャーロットに会ったときには小説を話題にする。この部分は作者自身によって語られる形になっている。

サー・エドワードの人生における大目的は女性を誘惑することであつた。彼が自認しているような美貌と、また、自信を以て誇り得る才能が備わっている以上、これこそ彼の義務と思われた。彼は自分が危険な男——正にラヴレースに伍して然るべき存在——として造られていると感じていた……彼が誘惑すべきはクレアラであり——彼女を誘惑することは彼が固く決心しているところであつた。

サー・エドワードにとっては、リチャードソンの作品中で最も模範とすべき人物はラヴレースなのである。

思いもかけず、パーカーの三きょうだい、ダイアナ、スーザン、アーサーが揃ってサンディトンへやって来る。ダイアナが一行の中心であるが、彼女がこの保養地へ世話した二つのグループのために住居や召使を斡旋しようがために来たのである。聞くと見るとでは大違いで、三人は病氣どころが大変元気である。ヒボコンデリーの典型なのであろう。ダイアナが二つのグループを招いたつもりでいたのは、実は一つのグループだったことが判明し、彼女は一瞬狼狽するが、これは間に入った人々が多すぎたために生じた間違いだった。

パーカー夫人は、貧しい人のための寄付を頼みにシャーロットと二人でデナム夫人を訪問する。途中でシドニー・パーカーに偶然会い、しばらく話をする。更にデナム邸に近づいたとき、シャーロットは朝もやの中に、クレアラとサー・エドワードがひそかに会っている姿を認める。

二人が邸に着き、居間に通されると、マントルピースの上に飾られた等身大の立派な紳士の肖像がシャーロットの目を捉える。サー・ハリー・デナムの肖像だとパーカー夫人が説明してくれる。そして、部屋の片隅にある多くの小さな肖像の中の甚だ目立たぬのがホリス氏のものだということであつた。

(この小説の断片はここで終わっている。)

* * *

この作品が未完成のままで残されたのは非常に残念である。構想にも文体にも、これまでのオースティンの作品に見られなかった新機軸が窺われるからである。新開拓の保養地で繰り広げられる人々の営みには、

今までになかった活気があり、文体は新鮮で軽快な感がある。時に Juvenilia に見られた筆法を彷彿とさせる所もある。例えばパーカー一家の三人のきょうだいや、デナム夫人の描写などである。しかし、全体としては、若いときの筆よりも、はるかに熟練を積んだものである。

登場人物の数が多いこと、それらの人々がおのおの経済生活に根ざした現実的な活動をしていることも、この作品の特徴の一つであろう。これらの人物のうち、誰が中心人物になるのか、未完の作から想像することは困難である。シャーロットをヒロインと決めてかかっている評論も多いが、これは如何なものであろうか。また、作者がこの作を“Brothers”と呼ぶつもりであったという説が真実だとすれば、パーカー一家の三兄弟が主人公ということになるだろうが、これにもわかには首肯し兼ねる。

風景や場面の雰囲気描写が堂に入っていることも、この作品の優れた特徴の一つであろう。

死を間近にした作者が、これだけの力を秘めていたことは大きな驚異とすべきであろう。